

第2回バリアフリーとインクルーシブ防災セミナー「視覚障がい者と災害」を開催しました (2023/7/19)

テーマ：視覚障がい者と災害
会場：災害科学国際研究所（仙台）

今年度、災害科学国際研究所 災害レジリエンス共創センターは、「誰一人取り残さない」防災を進めるために、所内教職員向けの「障がい者と災害：バリアフリーとインクルーシブ防災セミナーシリーズ」を実施しています。2023年7月19日には、第2回「視覚障がい者と災害」セミナーを実施し、視覚障がいの当事者と盲導犬、そして日本盲導犬協会の方々を講師に迎え、障がいのある方々が、平時および災害時にどのような困難に直面し、どのような支援が必要になるかに関する現場の生の声をお話いただきました。

本セミナーでは、はじめに、災害レジリエンス共創センター長の江川新一教授が挨拶を行い、障がいがあることは「病気」ではなく「健康」であること、「健康」の定義とされている身体的、精神的、社会的なウェルビーイングも一人ひとり異なり、それをどのように達成するかが重要であることを述べました。

次に、公益財団法人日本盲導犬協会 仙台訓練センターの根本学センター長から、視覚障がいは情報へのアクセス困難に直面しやすいこと等が話されました。続いて同センター 広報・コミュニケーション部の黒田匠氏から、「視覚障害と盲導犬～人と盲導犬が笑顔で歩ける社会へ～」と題して、盲導犬を含む補助犬、視覚障がい者と社会の現状について講演があり、環境が変わることによって障がい者が生きやすい社会をつくる「障害の社会モデル」の必要性等が述べられました。盲導犬は障害物、曲がり角、段差を教えることができますが、道案内はできません。目的地までの地図は盲導犬ユーザー自身が脳裏に描いていなければならず、ユーザーが道に迷うこともあります。参加者は、視覚障がい者の手引き歩行も体験しました。

続いて2名の視覚障がいの当事者の方々が、普段の生活および災害時について話されました。盲導犬により行動範囲が広がったこと、スマートフォンを用いたデジタル情報を積極的に活用していることなどが述べられた一方で、もし東日本大震災のような災害が起こったら、盲導犬とともにうまく避難できるか、受け入れてもらえるかに大きな不安がある等が話されました。総合討論の場では、小野裕一副所長がファシリテーターをつとめ、当研究所の教職員からさまざまな質問やコメントが寄せられました。

最後に当研究所の栗山進一所長が挨拶を行い、「誰一人取り残さないためには個別避難計画の作成が急務であり、本セミナーを受けて、今後、視覚障がい者と災害の専門家が一緒に計画策定を進めていく必要がある」と述べました。当研究所は、今後もインクルーシブ防災に取り組んでまいります。



災害レジリエンス共創センター
江川新一センター長挨拶



日本盲導犬協会 仙台訓練センター
根本学センター長のお話



黒田匠氏の講演



手引き歩行体験



当事者の方々との総合討論



会場の様子



記念撮影